

葉集を読む

松岡 隆子

梅雨出水とふ緊迫の最上川

矢作 裕子

七月末の豪雨で最上川が氾濫したというニュースに驚いて矢作さんに電話を掛けた。幸いにも矢作さんの家は少し離れた高台にあり大丈夫だと聞いて安心した。流域は広範囲にわたって浸水していると心配そうに話された。氾濫寸前の危機感を（緊迫の最上川）と確りと言いつつ留められて迫力がある。実感で掴んだ句は揺るぎない。

その後矢作さんから、被災は避けられなかった行政と住民の素早い避難行動が功を奏し、亡くなった人は無かったと便りがあった。

身構へることなき齡つくつくし

醍醐喜美枝

9月号の「俳句の窓」によると醍醐さんはもう米寿になられたという。一人暮しをされて二十年、俳句を心の糧として

自足の余生を過ごされている様子が窺える。若い時は気を張って生きてきたものだが、今は身構えることは何もない。しずかな齡につくつくほうしの声が染みわたる。

追伸のやうに鳴りけり秋風鈴

河本 順

八月は三秋のうちの初秋にあたるが、実際は真夏並みの暑さが続き、風鈴の音も夏の音そのままだ。秋の風鈴となるのは秋風が立つようになってからである。涼風に吹かれて鳴る風鈴の透き通った音こそ秋の風鈴の音と言えよう。なんとなく控えめに鳴る秋の風鈴の音は何か言い残したことでもあるような音に思える。誰かの手紙の追伸のように……。

愛らしき名の新米を買ひにけり

鈴木美代子

実りの秋、デパートやスーパーの食品売場に新米の袋が並ぶ。ラベルの銘柄を見比べながらどれを買おうかと迷いがちだが、鈴木さんは迷うことなく愛らしい名前の新米を買ったという。あきたこまち？ あやひめ？ ひとめぼれ？ 等々想像するのも愉しい。

掲句はやや報告性が強いように思われるが報告に終わってはいない。炊き立ての新米のおいしそうな匂いがしてくるし、つややかな耀きが見えてくる。

青柿の昨日の数の落ちゆけり

田中 律子